

故郷の母を思い、 世の苦しむ人たちのための戦いに生涯を捧げた、 日本の社会福祉の先駆者、山室軍平の生涯。

山室軍平は明治5年、岡山の本郷（現在の新見市）の貧しい農家に生まれました。母は、無事に成人すること、少しでも人の役に立つ人になることを祈り、生涯卵を食べないことを誓います。軍平は9歳で質屋の叔父の養子に出されますが、勉強したい思いから15歳で東京に飛び出し一人で生きようとします。その時、キリスト教の救済の精神を知り、新島襄の同志社で学びたいと京都へ行きます。学校が始まる前に久しぶりに故郷に帰ると、軍平を思い卵断ちを続けている母がいました。軍平はその母に涙し、人の役に立つ人になると改めて強い意思を持ちます。同志社を出て、労働者として働きながら平民のために生きようと決心したまさにその時に救世軍と出会いました。信仰による救済の前に、実生活を救おうとする救世軍はまさに軍平の理想の場所でした。貧しさは変わらぬ軍平でしたが、世の苦しむ人のために新たな戦いを始めます。娼妓自由廃業運動をはじめ、無料労働紹介所や結核療養所、児童虐待防止運動など多くの慈善活動を起こしました。そのひたむきな活動は、現在につづく日本の社会福祉の礎を成しています。

人びとの愛から生まれた映画です。

『地の塩 山室軍平』は、この映画の趣旨、また山室軍平の生き方に賛同くださった方々の愛により製作されました。賛助金をはじめ、クランクインの前から製作協力券として鑑賞チケットをご購入いただいた方は3000人を超え、改めて「山室軍平」という人物の大きさを実感しました。協力いただいた皆様の想いを受け止め、より多くの方々に現代社会においても普遍的な人間愛の尊さを伝えられる作品を完成できたと自負しています。是非、ご覧ください。



現代社会がすっかり見失ってしまった他者の幸せのために犠牲をもちしめない愛。その愛の調べが全篇に主旋律となって流れています。岡山県阿哲郡本郷村に貧しい農家の第八子として軍平が生まれたとき、赤ん坊が無事に成長すること、人様に迷惑をかけないで何か良いことをする者になるように神に祈り、その誓願として一生卵を食べないことを誓った「母の愛」に象徴される「神の愛」の調べです。遊郭で暴漢に襲われ、打たれ、殴られる中で、「皆さんを救うために戦争するは……特権に候! 限りなき幸福に候!」との救世軍士官の叫び、「幸福は唯十字架の側にあります」との臨終の妻機恵子の言葉、その愛の問かけが観る者に迫ります。素肌で大雨の中での信仰告白、大海原に登る日輪の光の中での献身の誓い。あまりにも美しく感動的なシーンは「血と火」に生きる救世軍のスピリットを物語っています。観終わって一陣の愛の風が吹き抜けていくような爽やかさを感じさせる秀逸な作品を一人でも多くの方が鑑賞されることを心から願ってやみません。

日本イエス・キリスト教団香登教会牧師 工藤弘雄

日本がめざましい勢いで近代国家となることを目指した時代、物質的な豊かさや軍事的な強さが達成される一方、様々な歪みも社会の中には生じていた。そのような時代の中で、貧しい者、虐げられた者たちに目を注ぎ、社会の底辺へと向かっていった山室軍平の姿が本作品では描かれている。山室の人生には「役に立つ人にならしてください」という母の願いがしみ渡っていた。また、山室を鼓舞した新島襄の早すぎる死は、山室に大きな失意をもたらしたが、同時に新島の精神と人格を学び取るうとする決意を促すことにもなった。本作品で新島の登場場面は決して多くはないが、「一国の良心」となる人物の輩出を志した新島の願いが、山室に受け継がれている様子を十分に確認することができるだろう。そして、「地の塩」、言い換えれば「良心の実践者」として生きた山室の生涯は、現代に生きる我々に対する挑戦的なメッセージとなっている。この秀作を単に歴史的な回顧として受けとるべきではないだろう。山室の志は、新たな「地の塩」を求めたいことを告げる作品である。

同志社大学 良心学研究センター長 小原克博



公式HP <http://yamamurogunpei.com/>

2017年

9月2日(土) ①10:30～ ②14:30～ (30分前開場)

まなび広場にいみ 大ホール (新見市新見123-2)

当日券：1,600円

学生 1,000円 小学生以下 800円

【お問い合わせ】新見市観光協会

新見市西方4161-27 TEL: 0867-88-8154

10月21日(土)ロードショー決定

シンフォニービル南斜め向かい

シネマ・クレール丸の内

TEL 086 (231) 0019 cinemaclair.co.jp